

陶器師なる主（2）

2008. 7. 8（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

エレミヤ書 18章1節から6節

主からエレミヤにあったみことばは、こうである。「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」私が陶器師の家に下って行くと、ちょうど、彼はろくろで仕事をしているところだった。陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。それから、私に次のような主のことばがあった。「イスラエルの家よ。この陶器師のように、私があなたがたにすることができないだろうか。——主の御告げ。——見よ。粘土が、陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。」

先ほど読みましたエレミヤ18章1節から6節までは、先週から少し考え始めました。主はエレミヤを陶器師の家に導かれたのです。もちろん当時だけでなく、主は私たちをも陶器師の家に導こうと望んでおられるのではないかと思います。エレミヤは、あの陶器師の家に行って主のことばをお聞きしました。彼は、幸いにも聞く耳をもっていたのです。私たちも陶器師の家に導かれて、主のことばをお聞きすることができれば本当に幸いです。当時の主のメッセージとこんにちの主のメッセージとは、もちろん変わりません。

エレミヤ書 29章11節

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

本当に素晴らしい約束です。この約束を与えられたお方はこの約束をもちろん守るお方です。先週話しましたように、粘土で器を造ることが書かれていますが、この粘土はもちろん人間です。ですから主の御心にかなった、主の良しとされる器ができなければいけません。粘土は、陶器師が満足するように形造られなければ役に立たないものになります。粘土である私たちが、イエス様の御心に、イエス様の御姿に変えられなければ、陶器師である父なる神は満足なさいません。ですから、

ローマ人への手紙 8章29節

神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子の姿に似たものにあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

救われることだけでは十分ではありません。主は、あなたのうちにも私のうちにも一つの目的をもっておられます。すなわち、「御子の御姿に変えられるように」との目的をもっておられます。そして今読みました4節を見ると、「陶器師は制作中の器を自分の手でこわし…」と書いてありますが、この一言だけについて考えると、間違っただけで受け取られやすくなります。望みのない絶望状態になってしまうからです。「自分の生活はもう台無しになってしまった。壊れた器のように失敗の生活だ。もう駄目。望みがない」と。過去の生活を振り返ってみると、きっとそこには喜びがなく、後悔に満ちて、また良心を責めるような事がたくさん思い出されるのではないのでしょうか。しかしこの4節には、ほかの器についても書かれています。これだけを見ると、主はご自分の御心になさるためにほかの器をお造りになった。あの人、この人をお立てになった。私は使いものにならない。もう捨てられたと考えると、とんでもない話になるのです。「陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた」とあります。すなわち主は最善をなさるお方ですから、主が意のままに造られた器は間違いなく、良い、素晴らしいものに違いありません。御心にかなう器を、主はお造りになることができるのです。

私たちが主の御心にかなう器になるためには、イエス様の御姿に変えられるためには、条件があるのです。まず粘土が陶器師に従うことです。陶器師のことを理解することではありません。従うことです。そしてろくろも必ず必要です。また当然ですが、陶器師の考え方、陶器師の性質も大切なのではないのでしょうか。

・「従順に従う」ことこそ、考えられないほど大切です。

ある人々は、「私もイエス様を信じます」と言いながら、従おうとしません。このような信仰は役に立ちません。サムエル上15章の中で、サムエルは当時の王であるサウル王に言ったのです。

サムエル記・第一 15章22節、23節

するとサムエルは言った。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」

従うことこそ、最も大切なのではないのでしょうか。つまり聞く耳をもつことです。当時サウル王は聞く耳をもっていなかったのです。サムエルという少年は、心から次のように言ったようです。「主よ。お話してください。しもべは聞いております」。絶えずこの態度をとる者こそ、大いに祝福されます。

・そして次に、「ろくろ」がどうしても必要です。

では、ろくろはどういうものかと言いますと、毎日毎日そこで過ごさなければならない環境のことです。聖書の話を書くことによって、真理を知ることができるかもしれません。聖書を読み、祈ることによって、主と交わることができるのです。けれど実際に主の御姿に変えられていくためには、毎日の生活における困難や苦しみを通して初めて変えられるようになるのです。

エレミヤは陶器師の家へ行った時、大切なことを見たのです。粘土をこねる人とろくろを回す人が同じ人でした。私たちが押し付け、苦しめるのはろくろではありません。陶器師すなわち主の御手であるということを、忘れてはいけません。主は最善のときに最良の方法をもって導いてくださるお方です。この陶器師とは、言うまでもなく「主ご自身」です。どんなにし損じた器となっても、御手の中に保っていてくださいます。これこそが「私たちの主」です。私たちが信じている主は、何ものによっても動かすことのできないご計画をもっておられるお方です。主は、最後まで成し遂げることのできないようなことを始められません。そのために主は、知恵、忍耐、恵み、愛、力を持っておられるのです。私たちの主は、失望することを知らない「望みの神」であられるのです。

今日は、新しく造られた器すなわち「再創造された器」について、考えたいと思います。

七つの例話を通し、主がどのようにして混乱し、罪に陥り、失敗に満ちた者を回復されたかということ、一緒に考えたいと思います。

主の「再創造」すなわち「作り替え」のみわざは、その場しのぎの取繕いや回復とは違います。「全く新しく創造され」、「作り替えられる」みわざです。再創造は、死と暗黒、自分自身に対する絶望の後にやってきます。

1. まずアダムとアベルについて考えたいと思います。

初めの人であるアダムは、祈っていなかったので、「主よ。お話してください。しもべは聞いております」という態度がとれないで、知らないうちに悪魔の声に耳を貸してしまったのです。罪を犯してしまい、そのために全ての被造物が呪われてしまいました。全人類も主の呪いのもとに陥ってしまったと聖書は語っています。これに対して偉大なる陶器師はいったい何をなさったのでしょうか。「仕方がない」、「もうできない」と言ってあきらめなさったのでしょうか。決してそうではありません。聖書の主は、そのようなことはなさいません。主は、哀れなさまになった粘土にもう一度御手を触れ、お働きになりました。

アダムの子どもの一人アベルは、「主の目にかなう者となった」と聖書は語っています。彼はその父アダムの罪の性質を受け継いでいましたが、偉大な陶器師なる「主の御手によって「新しく造られ」、主が良しと言われるまでに良き者になりました。イエス様ご自身が、マタイ伝23章35節によると、アベルを「義人」と呼ばれたのです。

2. アブラハムを観察してみましょう。

聖書は偉大な信仰の人の弱さや欠点を決して隠していません。アブラハムは実に哀れな粘土であったことが聖書を読んでいくとよくわかります。アブラハムは偽って、自分の妻を妹であると言いました。アブラハムは主に信頼しないで、自分の息子欲しさのあまり妾をもったのです。その結果どうであったかと言いますと、主はアブラハムに対してその後13年間、一言もみことばをおかけにならなかったのです。これは主の責任ではありません。信仰の父と呼ばれたアブラハムの責任でした。アブラハムのうちには何か良いものがあったのでしょうか。決してそうではありません。アブラハム自身は、ほかの人と同様に、哀れな取り柄のない粘土に過ぎなかったのです。しかし偉大なる陶器師主は、アブラハムを捨てようとなさらなかったのです。このし損じた器であるアブラハムは、後に本当に「信仰の父」と言われるまでになりました。全能なる主はアブラハムを「わが友」と呼ばれ、わたしのすることをアブラハムに隠してよいだろうか、とまで言われたのです。

創世記 18章17節

主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」

一言で言いますと、アブラハムは陶器師の心にかないました。イエス様と同じ御姿に変えられた者になりました。

3. ヤコブの場合を考えてみましょう。

ヤコブもやはり、普通の粘土に過ぎませんでした。彼は奸策により、長子の権利をその兄エサウから奪い取りました。それだけではなく、嘘をついて長子の祝福を受けました。また、主に頼らず自分勝手に妻を探して娶りました。彼はまたラバンの富をだまし取ってしまいました。これがヤコブでした。哀れな粘土だったのです。けれどヤコブはろくろの上に乗る、陶器師の手によって、陶器師の心にかなう器に造り変えられたのです。その時主の恵みはひたすらヤコブの上に降り注がれ、主のご栄光はこの新しく創造された器の上に臨み、後にヤコブは主の御名の後ろにその名を連ねるに至りました。彼は、「ヤコブの神」と呼ばれるようになったのです。

4. エリヤについて考えましょう。

ヤコブの手紙 5章17節前半

エリヤは、私たちと同じような人でしたが、…

と記されています。エリヤも同じ材料、同じ粘土でできていた者でした。エリヤは列王記上19章4節を読むと、全く絶望して、えにしだの木の下に座り込んでしまったことが書かれています。また、死のうと思ったのです。「もう十分です。私のいのちを取ってください」と。

エリヤの特徴はその信仰に勇気がありまた従順だったということですが、このエリヤもやはり、初めは粘土に過ぎませんでした。主の御手に陥って初めて御心にかなう器となりました。彼は死ぬことを望んだのですが、死をみないで天国に行くという素晴らしい特権にあずかるようになりました。変貌山でモーセとともに、彼はイエス様にお会いしたことも私たちのよく知っているところです（マタイ17：1～5）。エリヤは、主の御姿に変えられた人となったのです。

5. ダビデについて考えても、もちろん同じことです。

ダビデはもちろん主を信じ、主に従おうと思い、主のために生きたいと願った者でした。そして、その信仰生活の初めの半分を主の導きのままに過ごしましたが、彼の生活にも破綻がやって来ました。姦淫の罪を犯し、同時に殺人の罪まで犯してしまいました。私たちが自らの心をよく知っていなければ、あんなに素晴らしい信者でさえあのような罪を犯すのだろうかという疑問に思うことでしょうか。これに対し主なる神は、「ダビデはもう望みがない、あきらめて捨てしまおう」とおっしゃられたのでしょうか。いえ、それは聖書の神ではありません。大いなる陶器師は、この損なわれた器を御手のうちに収め、ろくろの上にお乗せになりました。それは本当に苦痛に満ちたことだったでしょう。ダビデは詩篇51篇で、たましいの底から出てくる叫び声をあげました。

詩篇 51篇3節

まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。

12節

あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

結局、救いの喜びもなくなってしまいました。しかし後にダビデは、「わたしはエッサイの子ダビデを見つけた。彼はわたしの心にかなう者だ」と言われるまでになりました。人を讃えるにこれよりも素晴らしいことばがあるのでしょうか。

6. ペテロです。

福音書を読むとわかります。ペテロも同様にみじめな材料でできた者でした。彼の生活のうちにも失敗はあったのでしょうか。やはり役に立たない粘土のような者だったのでしょうか。

ペテロは、力を込めて、たとえあなたと一緒に死ななければならぬとしても、「主よ。心配しないで。あなたを知らないなどとは決して申しません」と誓ったのです。けれども、まもなくペテロは、イエス様のことを知らないと否んでしまいました。ペテロは大した者ではなかったのです。私たちと同じ人間に過ぎなかったのです。このし損じた器はどうなったでしょう。彼は偉大な陶器師の手により、その心にかなう器に造り変えられました。

もし私たちがあの五旬節の時行なったペテロの証しを読み、裁判官の前でペテロがいかほど大胆にイエス様を証ししたかを考え、またペテロの書いた手紙を読むなら、彼がどれほど主の御心になつた素晴らしい器に造り変えられたかがわかります。彼は、主の恵みによって御子イエス様と同じ御姿に変えられた一人でした。

7. 最後にもう一人、マルコ伝の著者マルコを見てみましょう。

彼はエルサレムのいわゆるクリスチャンホームに育ちました。イエス様はこの若きマルコの家にしばしば出入りなさっておられました。ですから、マルコは幼いときにイエス様をその目で見、主のみことばをその耳で聞くことのできた本当に幸せな男でした。ある時、このマルコは自ら奉仕に立とうと決心し、パウロとバルナバの大伝道旅行に加えられました。彼は各地で主のみわざを目の当たりに見て旅を続けましたが、この旅はもちろん楽しい散歩道ではなく、決して楽な旅ではなかったのです。結果としてある時、彼は苦しさには耐えかねてパウロとバルナバから離れ、エルサレムに逃げ帰ってしまったのです。イエス様はおっしゃいました。

ルカの福音書 9章62節

するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

マルコはうしろを見ただけではなく、逃げてしまったのです。ろくろから下りてしまいました。けれどその後、彼はいったいどのように考えたのでしょうか。私は裏切った。私は本当に駄目。私のために、パウロとバルナバは争いを起こしてしまった。私のために、パウロとバルナバはともに働くことができなくなってしまった、と自らを非常に責めたに違いありません。

主なる神であられる陶器師は、このし損じてしまった器をも見捨てず、御手のうちに取り上げなさいました。偉大なる陶器師はこの器を全く新しく造り変えられました。その後、マルコを役に立たない者としていたパウロは、「マルコを連れて一緒に来なさい。彼は私の務めのために役に立つから」とテモテに書き送っているほどに、マルコは御心にかなう者となりました。主はそれに加えて、四福音書の一つ、マルコ伝を書くために彼を用いられたのです。このマルコ伝によりいかに多くの人々が救われて主のみもとに立ち返り、またどんなに多くのキリスト者が、マルコ伝によって祝福されたことでしょうか。マルコは、「陶器師の心にかなう器」になったのです。限りない知恵と忍耐をもっておられる陶器師なる主が、ろくろの上に乗っている粘土のような私たちを、そのみ御手にしっかりと握っておられることは、何と素晴らしいことでしょうか。

アブラハム、ヤコブ、エリヤ、ダビデ、ペテロ、マルコは、「新しく造られた器」、「再創造された器」となりました。陶器師なる主が言われます。「わたしがあなたがたを、御子イエスのかたちに変えることができないだろうか」と。

もう一つの観点から考えたいのです。ここまでは陶器師によって新しく造られた七つの器を考えてきたのですが、今度は陶器師の手から漏れて壊れて回復されなかった四つの器について考えたいと思います。私たちはここでやめて、暗い面を覗き見ないでおいたほうが良いような気もしますが、聖書は違います。聖書は、明るい面だけを述べていません。主の御手から漏れ、し損じた器で、終に回復せずに終わってしまった器もある、と聖書は記しています。アベルの兄弟カイン、ヤコブの兄エサウ、ダビデの敵サウル、そしてイエス様の弟子の群れから離れて行ったイスカリオテのユダ。この四人です。

なぜ神のみことばである聖書は、回復されなかった器について書いているのでしょうか。

まず、なぜ回復されなかったかという理由を私たちに教えるために、またなぜ回復されたかと比較して私たちに教えるために、書かれているのではないかと思います。

二番目に、私たちが回復に向かうか、滅びに向かうか、二つに一つを選び取る決心をするためなのではないでしょうか。

1. 初めにカインについて少し考えたいと思います。

ヨハネ第一の手紙をまず読みましょう。

ヨハネの手紙・第一 3章12節

カインのようであってはけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです。

カインはいわゆる宗教的な男でした。彼は主の存在をもちろん疑わなかったのですし、信じました。この主に彼は捧げものをしていました。しかし彼は、捧げものをしなければ神は喜びたまわない、ご利益がない。そのような動機から捧げものをしていました。喜んで主にささげることをしなかったのです。

しかし、なぜカインは回復しないで滅んでいってしまったのでしょうか。彼には罪の自覚が全くありませんでした。彼は自分自身を知らなかったし、知ろうともしなかったのです。カインは自らを正しいとし、自らに満足していました。ですから、カインは自分の身代わりとなってくださる救い主を必要としませんでした。彼がアベルを殺す前に誰かが彼のところへ行って、あなたは人殺しと同じ罪人だと言ったとしても、彼はうなずかなかっただけでしょう。カインは罪の自覚がありませんでした。私たちは主の前に正直になろうとしなければ回復されません。

アブラハム、ヤコブ、エリヤ、ダビデ、ペテロ、マルコ、これらの人たちは、自分のどうすることもできない罪の性質をよく認めたので、どうしても陶器師の助け、救い主を必要としたのです。カインの場合は、それとは全く反対でした。どんなに優れた陶器師も、

このような粘土を扱うことはできません。救われたくなければ、悲劇に終わるでしょう。もし私たちがダビデのように人を殺し、ダビデのように、「私は自分の咎を知っています。私の罪はいつも私の前にあります。私はあなたに向かい、ただあなたに罪を犯しました。あなたの前に悪いことを行ないました」と叫ぶことができるならば、もちろん望みがあります。「お前はわたしの心になつた者である」と主に御声をかけていただける望みがあります。

2. エサウについて考えたいと思います。

エサウは、霊的なことを尊ばない典型的な人物でした。創世記25章を読んでみましょう。
創世記 25章31節から33節

するとヤコブは、「今すぐ、あなたの長子の権利を私に売りなさい。」と言った。エサウは、「見てくれ。死にそうなのだ。長子の権利など、今の私に何になろう。」と言った。それでヤコブは、「まず、私に誓いなさい。」と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼の長子の権利をヤコブに売った。

ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり飲んだりして、立ち去りました。こうしてエサウは「長子の権利」を軽んじたのです。それだけではなく、ヘブル人への手紙の中に、このエサウの態度について次のように書かれています。

ヘブル人への手紙 12章15節から17節

そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、また、不品行の者や、一杯の食物と引き換えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がないようにしなさい。あなたがたが知っているとおおり、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。

イスラエルの国では、長男が家族の長となり、主なる神に仕えるように定められていました。その家族の祭司として立てられましたので、長男は霊的なことをいつも執り行なうことになっていたのです。長男は家族の祭司として、家族を主のご臨在に導く責任がありました。けれど創世記25章に、エサウは「長子の特権を軽んじた」、「長子の権利を軽蔑した」と書かれています。どんなに偉大な巧みな陶器師でも、このような人物を取り扱うことはできません。粉々に砕かれなければ、また「あわれんでください」という気持ちがあれば、回復は不可能となります。

3. サウルの場合はどうだったのでしょか。

彼はご存じのようにダビデの敵でした。彼には「主に信頼する信仰」と「へりくだり」が欠けていました。主は預言者サムエルを通して彼に語られましたが、彼はそれに従おう

としなかったのです。彼は主に信頼しなかったのです。このような粘土を陶器師は思いのままに扱うことができません。彼の最期はご存じのように自殺でした。主が私たちを御心のままに形造られるには、私たちの「信仰と従順と信頼」が必要です。

4. ユダについて考えるとわかります。

彼は、イエス様とともに三年半一緒に生活しました。素晴らしい特権にあずかるようになりました。もし今私たちがイエス様とともに生活し、主との交わりができるとするなら、それこそ素晴らしい特権ではないでしょうか。ユダはイエス様との交わりに召されたのに、ただの銀30枚で全てを失ってしまいました。ユダは、「主との交わりを持つことができるという素晴らしい特権」に気がつかなかったのです。

コリント人への手紙・第一 1章9節

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

と記されています。私たちひとりひとりが、イエス様に召されて、御子主イエス様との交わりにあずかる素晴らしい特権を与えられているとは、何と幸せなことでしょう。主である偉大なる陶器師が、哀れな粘土である私たちを御子のかたちに「造り変えられる」ためには、私たちがこの「驚くべき特権」を深く知ることがきわめて大切です。私たちはこの「特権」を用いてもっともっとイエス様との交わりを深めたいものです。ユダはこの特権を軽んじました。彼の最期を見てください。彼は自殺してしまっただけです。ほかの道もあったはずですが。つまり十字架につけられたイエス様のところに行って、「三年半の間大嘘つきでした」、「あわれんでください」、「ごめんなさい」という態度をとったなら、イエス様は十字架上の犯罪人のひとりに対してと同じことをおっしゃったに違いありません。「あなたは今日わたしとともにパラダイス、天国にいるようになります」と。彼は後悔しただけなのです。イエス様の御前に行こうとしなかったのです。逃げ続けたのです。

私たちも、もしイエス様との本当に親しい交わりを持っていないなら、それは「霊的な自殺」です。主はもちろん全てご存じです。主は私たちがどんな材料でできているかも、もちろん全部知っておられるのです。それにもかかわらず、主は、私たちに対して決して失望されないお方です。主はあきらめることをなさいませぬ。主は、限りない忍耐と愛を持って、ご自身の「御心にかなった器」に造り変えようと、私たちを御手のうちに治めておられます。私たちは、この永遠に変わらない「主の恵みの御心」を心の目ではっきりと見、知っているのでしょうか。

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

と初代教会の人々は証しましたのです。

私たちは、陶器師が操るろくろの上に乗っている従順な粘土となっているのでしょうか。それはきっと苦しいことでしょう。しかし、初代教会の人々は結局、「今確かに大変です。けれど大切なことは今からです。将来です」と。

私たちは人に喜ばれても喜ばれなくても、人に認められても誤解されても、もし私たちが主の御心にかなう器でさえあればそれで良いのでしょうか。

主の永遠に変わらない恵みのご計画とはどのようなものなのでしょうか。その道はどのようなものなのでしょうか。

私たちはどのような心構えを持つ者なのでしょうか。

最後にみことばだけ読んで終わります。

ヨハネの福音書 3章30節

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。

ガラテヤ人への手紙 2章20節前半

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

コロサイ人への手紙 1章27節後半

この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

ガラテヤ人への手紙 4章19節

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

コリント人への手紙・第二 4章7節前半

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていいます。

「この宝」とは、イエス様です。

コリント人への手紙・第二 4章10節

いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

コリント人への手紙・第二 4章17節、18節

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

ローマ人への手紙 8章29節前半

神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。

エレミヤ書 18章4節

陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。

と書かれています。

了